#### 研究室ゼミ

# A Natural Semantics for Lazy Evaluation

水野雅之

2016年11月30日

#### これまでの研究

#### 入出力を含む純粋でない関数型言語の K正規化を検証



CakeML(ICFP2016) や Pilsner(ICFP2015) →call by value な関数型言語処理系の検証は red oceanっぽい



call by need(以後cbn)な関数型言語へ

#### 今回紹介する論文

- A Natural Semantics for Lazy Evaluation
- A locally nameless representation for natural semantics for lazy evaluation
  - ↑↑ に locally nameless representation を導 入したもの

#### アウトライン

- 1 A Natural Semantics for Lazy Evaluation
- 2 A locally nameless representation for natural semantics for lazy evaluation

#### A Natural Semantics for Lazy Evaluation

- cbn な λ 計算の拡張の大ステップ操作的意味論を定義する論文
  - λ計算に相互再帰的な let を入れた言語 が対象
  - 変数名をthunkのlocationとして流用
    - ▶ 時々束縛変数の renaming が必要

#### 論文のモチベーション

- 実際の処理系の実装を模した意味論を 定義したい
  - 値の sharing
  - 一度評価された関数引数は再び評価されない
- 先行研究はtoo concrete
  - 継続、コードポインタ、スタックポインタ、間接参照を含むノード等
  - ・証明に使うには大変

#### 対象言語

- λ計算に相互再帰な let を導入した言語
- ■評価に先立ち構文を制限

$$e ::= \lambda x. \ e$$

$$\mid e x$$

$$\mid x$$

$$\mid \mathbf{let} \ x_1 = e_1, \cdots, x_n = e_n \ \mathbf{in} \ e$$

#### 評価規則

$$\Gamma: e \Downarrow \Delta: z$$

$$\overline{\Gamma : \lambda x.e \Downarrow \Gamma : \lambda x.e}$$

$$\frac{\Gamma: e \Downarrow \Delta: \lambda y. e' \quad \Delta: e'[x/y] \Downarrow \Theta: z}{\Gamma: e \ x \Downarrow \Theta: z}$$

$$\frac{\Gamma: e \Downarrow \Delta: z}{(\Gamma, x \mapsto e): x \Downarrow (\Delta, x \mapsto z): z}$$

$$\frac{(\Gamma, x_1 \mapsto e_1 \cdots x_n \mapsto e_n) : e \Downarrow \Delta : z}{\Gamma : \mathbf{let} \ x_1 = e_1, \cdots, x_n = e_n \ \mathbf{in} \ x \Downarrow \Delta : z}$$

## 必要なら白板で...

- ■評価関係は帰納的に定義するため、無限 回の規則適用は許さない
- 一見無限回評価規則を適用できそうな式の評価でも、有限回の適用で終了する場合がある
- 評価の途中で renaming が必要になる場合 がある

#### 表示的意味論との対応

Coqでの検証に使えるか微妙なので、あまり詳しく追ってません

- 最小不動点を使う、ありがちな 表示的意味論
- Correctness はいわゆる健全性
- Computational adequacy はいわゆる健全性+完全性

### 意味論の拡張

- コンストラクタの追加
  - コンストラクタの中身は変数に制限
  - コンストラクタも値とする
- GC の実装
  - ・環境がヒープに相当
  - 全体の式から到達できない変数の束縛 を削除
- 評価のコストのカウント
  - 計算に要したステップ数の評価ができる

#### アウトライン

- 1 A Natural Semantics for Lazy Evaluation
- 2 A locally nameless representation for natural semantics for lazy evaluation

## A locally nameless representation for natural semantics for lazy evaluation

- 先に解説した論文に locally nameless representation を導入する論文
- Correctness や computational adequacy は証明していない
- (この時点では)Coqを使っていない
  - ・後にCoqで書いた論文も出ている模様

#### 論文のモチベーション

- 先に挙げた論文の意味論は変数名に深く 依存している
  - ・評価前に renaming が必要
  - 評価中に必要になる場合も
- 名前で束縛を表現するため定理証明支援 系での扱いが煩雑



#### これらを解決したい

#### Locally nameless representation

■ 自由変数を名前で、束縛変数を de Bruijn index で表現する手法 • シフト "は" 不要になる

 $egin{array}{lll} v & ::= & \mathbf{bvar} \ i \ j & | & \mathbf{fvar} \ x \ t & ::= \ v & | & \mathbf{abs} \ t \ | & \mathbf{app} \ t \ v & | & \mathbf{let} \ \{t_i\}_{i=1}^n \ \mathbf{in} \ t \ \end{array}$ 

#### Variable opening

束縛の中身を処理する場合、束縛されていた変数が自由変数になる →インデックスで表現された変数を名前による表現に直す

#### Variable closing

変数を束縛する際、束縛された変数をイン デックスでの表現に直す

→Opening の逆の操作

#### Local closure

■ 自由変数は名前で、束縛変数はインデックスで正しく表現されているかを表す 述語